『お気に召すまま』の森再考

道　行　千　枝

1. はじめに

As You Like It（1599年）はシェイクスピア喜劇の最高傑作，そして最も幸福な喜劇と評価されてきた。それは才気に溢れた男装の女主人公Rosalindの活躍に因るところが大きい。しかし彼女の行動を可能にしている舞台―アーデンの森―も，この作品のもう一つの欠かせない存在である。筆者は拙稿「『お気に召すまま』の森―その役割と意味」（1998年）[1]の中で，アーデンの森について論じた。最終幕で宮廷に戻る主人公たちに背を向けて，皮肉屋のJaquesは自ら進んで森に残る選択をする。大団円に水を差すような彼の行動は，何を意味するのか。筆者は，劇中における森の役割について，あるときは逃亡者のつかの間の隠れ家となり，あるときは牧歌的恋愛ロマンスの舞台となり，最終幕では隠遁の地としての存在意義が強調されていることから，劇中の森の役割が場面によって多様に変化していく様子を指摘した。

それから約20年が経ったが，その間にシェイクスピア研究をめぐる環境も変化した。かつてはシェイクスピア研究にエコクリティシズムを採用することは時代錯誤という見方が強かったが，近年その分野での研究は進み，エリザベス朝末期からジェイムズ朝のイングランドにおいて，実のところ，そ

[1] 道行千枝，「『お気に召すまま』の森―その役割と意味」，『九大英文学』第41号（九州大学大学院英語学・英文学研究会，1998）

れまでにない速さで人口増加と環境破壊が進んでいたことが指摘され[2]，同時代の文学作品の中に変わりゆく自然環境への言及や懸念を読み取る試みも見られはじめた。[3] さらに，二十一世紀に入ってシェイクスピアの正体をめぐる議論が研究者のみならず広く文化人の間で盛んになり，その結果，作者の伝記にまつわる研究も進んだ。[4] シェイクスピアが故郷ストラットフォードでは有数の資産家，実業家と目されていたことも，契約書など公的文書の存在で明らかになっている。*As You Like It*のアーデンの森はトマス・ロッジの種本にならってフランスに設定されているにもかかわらず，イギリス的な特徴に富み，シェイクスピアの故郷ウォリックシャーのアーデンの森をいやがおうにも連想させる。作者が故郷の森を執筆材料に利用した可能性は十分考

---

[2] イングランドにおける環境破壊は産業革命後に激化したことから，エコクリティシズムは十九世紀以降の作品を対象にすることが妥当とされてきた。しかし実際，十七世紀のイングランドにおいてもかつてない規模で環境破壊が進んでいた。人口の増加については，ブリテン島の人口は1500年頃には440万人だったが，1700年頃には930万人に膨れ上がっていた。同じ時期のヨーロッパ全体の人口増加率42％と比べると，ブリテン島での人口増加は110％ととりわけ急激なものだったことがわかる。（Victor Skipp, *Crisis and Development: An ecological case study of the Forest of Arden 1570-1674*（Cambridge: Cambridge U.P., 1978), 3）また，ロンドンの人口は1500年頃には4～5万人だったが，1600年頃には20万人に，1650年頃には35～40万人と急増している。他のヨーロッパの都市と比較すると，1500年頃にロンドンよりも人口の多いところはヨーロッパに10都市あったが，1600年頃にはわずか2都市に減少した。人口増加を背景に環境破壊が進んだが，その主な原因に，囲い込みによる開墾や燃料としての木の伐採，干拓などが挙げられる。（Bruce Boehrer, *Environmental Degradation in Jacobean Drama*（Cambridge: Cambridge U.P., 2013), 2–3）

[3] エコクリティシズムの観点を取り入れた近年の研究として主なものを挙げておく。Tom MacFaul, *Shakespeare and the Natural World*（Cambridge: Cambridge U.P., 2015), Bruce Boehrer, *Environmental Degradation in Jacobean Drama*（(Cambridge: Cambridge U.P., 2013), Vin Nardizzi, *Wooden Os: Shakespeare's Theatres and England's Trees*（Toronto: University of Toronto Press, 2013), Gabriel Egan, *Green Shakespeare: From Ecopolitics to Ecocriticism*（Oxon: Routledge, 2006）

[4] 河合祥一郎『シェイクスピアの正体』（新潮文庫, 2016), 7–17

えられる。シェイクスピアの伝記研究が進むにつれて，彼の故郷の土地との関わりについても徐々に明らかになってくる。それらの情報が，作品の解釈の可能性を広げてくれることにもなるだろう。

劇中の森はあくまで架空の世界であるが，同時代の現実の森を意識させるせりふや場面が随所に見られる。とりわけ，森の中で細々と牧羊業にたずさわるCorinの存在は，同時代イングランドの零細農民が置かれていた厳しい現状を訴えるものとして注目されてきた。しかし，これまでの一般的な解釈では，Corinの存在はあくまでも作品に色を添えるものでしかなく，主題はRosalindたちの恋愛模様にあると捉えられてきた。西原幹子は次のように述べている。

> コリンは確かに当時の農村社会の抱えていた矛盾を代弁しているし，素朴な牧人としての人生哲学を垣間見せているが，「アーデンの森」における中心はコリンの生活にはなく，やはり何と言っても，男装したロザリンドを取巻く恋の戯れのほうに置かれている。コリンの生活はパストラルという舞台の一部をなしているに過ぎず，「アーデンの森」の全体を覆っている緩慢な時間の感覚のなかで，現実への関心は逸らされているように思われる。こうした理由から，「アーデンの森」は社会批判の道具としては弱い，と批評家の間では批判される面を持っている。つまり，現状肯定にとどまり，既存の秩序に揺さぶりをかけるほどの威力は持っていない，ということになるだろうか。[5]

本稿は，現実社会を投影していると思われる場面やせりふに着目することで，*As You Like It*の「社会批判の道具」としての可能性を再検討する試みである。同時代の自然環境や社会の状況に目を向けながら，アーデンの森についてもう一度考えてみたい。

---

[5] 西原幹子「エリザベス朝パストラリズムの諸相～*As You Like It*における「アーデンの森」をめぐって～」，『沖縄国際大学外国語研究 11(1)』（沖縄国際大学，2008），157

以下，第二節「森という舞台」では，森の構造について，アーデンの森が大きく二つの区域，すなわち，Rosalindたちの「牧草地」（pasture）とDuke Seniorらの隠れ住む「森林地帯」（woods）に分かれている様子を述べ，それぞれの区域がどのように描かれているのかを比較する。第3節から第5節では，「飢え」「囲い込み」「森林破壊」をキーワードに，同時代の社会問題が映し出されていると考えられる場面を取り上げ，*As You Like It*の風刺的側面に着目する。

2. 森という舞台

シェイクスピア作品には森が登場するものがいくつもあるが，*As You Like It*ほど作品の大部分を森の場面が占めるものは他にない。本稿の末尾に登場人物の出場場面を記した香盤表をつけている。表には各幕各場の行数，場面設定，登場人物を示したが，それによると，セリフが全体で2699行あるうち2009行がアーデンの森が舞台となっている場面で発されている。[6] 割合にして，74％が森を舞台としていることになる。この作品で森が重要な役割を担うことは言うまでもない。では，劇中の森はどのような森なのか。シェイクスピアは，*As You Like It*の種本にトマス・ロッジの散文ロマンス*Rosalynde*（1590年）を利用した。ロッジのアーデンの森はフランス北東部のアルデンヌの森をモデルにしている。*As You Like It*も第一幕はフランスに設定されているが，登場人物たちがいざ森に入ると，彼らを出迎えるのはイングランドの森である。逃亡者たちはロビン・フッドの一味にたとえられ，森の別の場所ではイングランド伝統の牧羊が営まれている。TouchstoneとAudreyが野原で結婚式を挙げようとするところをJaquesが止めに入り，教会で挙式するように促す（三幕三場）のは，同時代のイギリス国教会の教え

[6] 本稿で参考にした版は William Shakespeare, *As You Like It*（The Arden Shakespeare Third Series), ed. Juliet Dusinbere（London: Thomson Learning, 2006）である。作品からの引用はすべて上記に拠る。

を反映させたものである。さらにウォリックシャーの方言も登場する。[7] シェイクスピアの観客は，舞台がフランスに置かれていると知らされながらも，ごく自然にウォリックシャーのアーデンの森を連想したであろう。

シェイクスピア時代の観客にとって，国土の中心に位置し，広大な範囲にわたって緑に彩られたアーデンの森は特別な存在であった。

> To many Elizabethans, moreover, the Forest of Arden in particular was anything but a terra incognita in a remote corner of the kingdom. A dominant geographical feature of the central Midlands since the Middle Ages, by the sixteenth century the Forest or Woodland of Arden had become a famous and storied region covering over two hundred square miles in the heart of England.[8]

まずその森という場所がどのようなものだったかについて確認しておかなければならない。現代人の語彙感覚では，「森」（forest）といえば鬱蒼と木々の生い茂る土地を思い浮かべるが，A. Stewart Daleyによると，シェイクスピアの時代には，森は牧草地（pasture），荒地（wastes），森林地帯（woods）などいくつかの地形で構成された未開墾地を意味した。

> For at least two centuries now, *forest* has suggested to the reader a dense growth of trees and underbrush covering thousands of acres. During medieval and Tudor times, however, *forest* denoted a largely untilled district composed of pastures, wastes, and usually but not

---

[7] Touchstoneは“batlet”（2.4.46）という単語を使う。アーデン版の注によると，batletとは“a Warwickshire dialect word for a butter paddle”（Dusinberre ed., 206, 2.4.46注参照）である。

[8] A. Stewart Daley, “Where are the woods in *As You Like It*?”, *Shakespeare Quarterly Vol.34* (1983), 175

necessarily woods.[9]

森（forest）といえば，中世以来イングランド各地に点在する国王の狩場「フォレスト」についても考えておく必要があるだろう。王領フォレスト（royal forest）は，国王の狩場を確保するためにフォレスト・ロー（forest law）によって守られた領域である。そこではフォレスト・ローがコモン・ローに優先され，一般による狩猟，特にシカ狩りが禁じられるなど，多くの制約があった。劇中の森が王領フォレストであるかどうかについては，はっきりとした言及がない。しかしシカ狩りをするDuke Seniorらが「簒奪者」（“usurpers” 2.1.61）と呼ばれていること[10]や，逃亡者たちがかの有名な密猟者ロビン・フッドの仲間たちにたとえられていること（“they live like the old Robin Hood of England” 1.1.110–1），またRosalindたちの羊飼い小屋が「旧フォレスト地」（“purlieus” 4.3.75）[11]にあることから，劇中の森が王領フォレストに限りなく等しい存在であることがわかる。実際のアーデンの森は，それ自体は王領フォレストではなかったが，西側と北側はフェクナム（Feckenham），キンヴァー

---

[9] Daley, 174

[10] First LordはDuke Seniorへの報告の中で，JaquesがシカSiorらを“usurpers, tyrants”（2.1.61）呼ばわりしていると伝える。一義的には，動物を殺すことが自然界に対する「簒奪」になるということだが，王領フォレスト内でシカ狩りが禁じられていた事実も含意するものと考えられる。つまり，Duke Seniorたちは密猟しているのである。当時シカの密猟は紳士階級の若者の間に流行しており，度胸試しのゲームとして，また特権階級への抵抗運動として，頻繁に行われていた。シェイクスピアにシカ泥棒の伝説があるのにも，こういった背景がある。Roger B. Manning, *Hunters and Poachers: A Cultural and Social History of Unlawful Hunting in England 1485–1640*（Oxford: Clarendon Press, 1993, rpt. 2011），171–189参照。

[11] 「旧フォレスト地」（purlieu）とは，王領フォレストの隣接地で，エドワード一世の治世以前にフォレスト指定を解除された土地のこと。旧フォレスト地の所有者はフォレスト・ローから免除されたが，そこでの国王のシカは保護が義務付けられていて，自由に狩猟することはできなかった（酒井重喜『近世イギリスのフォレスト政策—財政封建制の展開—』（ミネルヴァ書房，2013），5）。

（Kinver），モーフェ（Morfe），キャノック（Cannock）などの王領フォレストに囲まれ，北東側はレスター・フォレスト（Leicester Forest）とチャーンウッド（Charnwood）に隣接しており，王領フォレストとの境界線は明確ではなかったという。[12]

> Though never a forest in the technical sense, as being a royal preserve, it is clear from ancient charters that Arden was nevertheless deserving of that description whether strictly or not [⋯].[13]

この時代の「森」（forest）が樹木の茂る土地だけでなく，そのほかの複数の地目を含むことはすでに確認したが，王領フォレストについても同じことが言える。

> ［王領］フォレストには，森林地・コピス地・開放耕地・開放草地（plain, ridding）・囲い込み草地（lawn, laund）・荒蕪地・開拓地（assart）などがあり，森林地以外のものは，なんらかの形で樹木を伐採した平地であった。そこが耕地として使用されることは少なく多くは放牧地として利用された。[14]

エリザベス朝の人々が抱いていた「森」の概念や，王領フォレストがいくつもの地目を含んでいたことを考え合わせると，劇中のアーデンの森のすがたも単調なものではないと考えられる。Daleyは，アーデンの森が大きく二つの領域に分かれていると指摘する。Rosalindたちの羊飼い小屋は牧草地（pasture）にあり，Duke Seniorらの隠れ家は森林地帯（woods）にある。[15]

---

[12] Daley, 175

[13] William Cooper, *Henley-in-Arden: An Ancient Market Town and Its Surroundings* (Birmingham: Cornish Brothers, 1946), xi（Daley, 175 からの重引）

[14] 酒井, 40［　］内は筆者。

[15] Daley, 179–180

この両方を行き来するのは，OrlandoとJaquesだけで，その他の登場人物たちは最終場を除いて自分にあてがわれた領域を離れることがない。[16] Daleyが指摘するように，Ganymede（Rosalind）はOrlandoやDuke Seniorらにとって常に「羊飼いの若者」として認識され，その住処である牧草地から離れることはない。

> To Phebe, Orlando and Duke Senior, Ganymede is manifestly a shepherd youth, as the text makes clear, and whoever wants to see the youth—whether Orlando, Phebe, Silvius, or Oliver—must come to the sheep farm（III.ii.427 ff., III.iv.18–19, III.v.74–75, IV.iii.75–77）, for that is her venue.[17]

シェイクスピアは，Rosalindたちの牧草地とDuke Seniorらの森林地帯をはっきりと描き分けている。牧草地の場面は文学の伝統に沿って牧歌的に描かれている。秩序が崩壊した宮廷を逃れるべく，CeliaはRosalindを森への逃避行に誘う。Celiaの「さぁ喜んでいきましょう，／追放ではなく自由を目指して。」（“Now go we in content / To liberty and not to banishment.” 1.3.134–135）の言葉が示すように，二人は冒険旅行か遊山にでも出かけるかのような気分でアーデンの森に入る。彼女たちは羊飼いの暮らしを金で買うが，労働に従事することもなく，恋のままごとに興じる。Rosalindたちにとって，森での生活は現実からの一時的逃避であり，つかの間の休暇なのである。

> ROSALIND
>
> Come, woo me, woo me—for <u>now I am in a</u>
> <u>holiday humour</u> and like enough to consent.（4.1.62–63）[18]

---

[16] 道行，11

[17] Daley, 173

[18] 下線は筆者。

彼女たちは現実の厳しい自然にさらされることがない。Rosalindはヤシの木（“palm-/tree” 3.2.171–172）に自分にあてられた恋の詩がつづられた紙片が留められているところを見つける。彼女たちの羊飼い小屋はオリーブの木に囲まれている（“’Tis at the tuft of olives here hard by” 3.5.76）。これらは南国の植物であるから，Rosalindたちの牧草地は温暖な気候にあるとの連想を生み出す。実際，牧草地の場面では登場人物たちが風雨の冷たさに不満をもらすことは一度もない。

一方，森林地帯では，より現実的な自然が描かれる。Duke Seniorは，欺瞞や陰謀の渦巻く宮廷に比べて，森の生活は身体的には辛いが，偽りがなく安心できると言う。

DUKE SENIOR

Now, my co-mates and brothers in exile,
Hath not old custom made this life more sweet
Than that of painted pomp? Are not these woods
More free from peril than the envious court?
Here feel we not the penalty of Adam,
The seasons’ difference—as <u>the icy fang</u>
<u>And churlish chiding of the winter’s wind</u>,
Which when it bites and blows upon my body
Even till I shrink with cold, I smile and say:
‘This is no flattery. These are counsellors
That feelingly persuade me what I am.’
<u>Sweet are the uses of adversity</u>,
Which, like the toad, ugly and venomous,
Wears yet a precious jewel in his head;
And this our life, exempt from public haunt,
Finds tongues in trees, books in the running brooks,

Sermons in stones, and good in everything.（2.1.1–17）[19]

Duke Seniorが「氷の牙と猛り狂う冬の風」（6–7）に耐え，Amiensが別の場面で「ここにある敵はただ冬の嵐」（“Here shall he see no enemy / But winter and rough weather.” 2.5.38–39）と歌うように，森林地帯では厳しい寒さについて繰り返し語られる。Duke Seniorは，「逆境のもたらす恩恵ほど甘美なものはない」（12）と，自らの置かれた状況を肯定的に捉えようとするが，最終幕で宮廷に戻ることができるとわかったとたん，彼は少しのためらいもなく森を後にする。Duke Seniorが森に住むのは，他に選択の余地がないからである。彼は，食糧を分けてもらえると知ったOrlandoが瀕死のAdamを迎えに出ていく姿を見送りながら次のように言う。

DUKE SENIOR

Thou seest we are not all alone unhappy.
This wide and universal theatre
Presents more woeful pageants than the scene
Wherein we play in.（2.7.137–140）

これは，森での生活が「みじめ」（“unhappy”）で「悲しみに満ちた」（“woeful”）ものであるという前提で発せられた言葉である。すなわち，先に引用した二幕一場のDuke Seniorのセリフは，痛みをさらなる痛みで和らげるための，つまり，より過酷な状況を引き合いに出し，森の生活の厳しさを，自分たちが耐えうる程度のものに言い換えようとする詭弁ともいえる。最終場で，弟の改心と公領返還の知らせを聞いたDuke Seniorは，「辛い日夜」を共にした仲間たちに宮廷に戻ることのできる幸運を祝福する。

[19] 下線は筆者。

DUKE SENIOR

First, in this forest let us do those ends
That here were well begun and well begot;
And after, every of this happy number
That have endured shrewd days and nights with us
Shall share the good of our returned fortune,
According to the measure of their states.（5.4.168-173）[20]

このように，一見したところRosalindたちの牧草地の場面では牧歌的架空の世界が，Duke Seniorらの森林地帯の場面ではより現実に近い自然の厳しさが描かれている。しかし，そのような明快な区分が本当に有効なのだろうか。劇中には，同時代の農業改革や自然災害，飢饉について言及していると思われる場面が所々に見られる。それらは公爵らの森林地帯の場面にとどまらない。一見安穏として見える牧草地の場面にも，同時代の現実社会の厳しさが垣間見える。現実社会への言及と思われる箇所を拾いながら，*As You Like It* の反牧歌的側面，風刺的側面に焦点を当ててみることにする。まず，本作を書くにあたって，作者にとっておそらく最も直接的な執筆材料となった故郷ウォリックシャーのアーデンの森の状況はいかなるものだったのか。次節以降では，ウォリックシャーやアーデンの森を中心に同時代のイングランドの農業事情，土地事情，さらにシェイクスピアの伝記にも目を向けながら，作品を通して見えてくる同時代の社会問題を探っていく。

3. 森の中の現実（1）飢え

劇中には随所に食べることについての話題や，空腹を訴える言葉が登場する。Orlandoは兄Oliverから家畜同然の扱いを受け，「豚飼いをさせられ，

[20] 下線は筆者。

豚と同じ餌を食えとでも言うのか」（“Shall I keep your hogs and eat husks with them?” 1.1.35–36）と兄を責める。Duke Seniorはかつて自分の領土だった森でシカを密猟して食糧を得る（“Come, shall we go and kill us venison?” 2.1.21）。Celiaは森に入ったとたんに空腹を訴える（“I pray you, one of you question yon man / If he for gold will give us any food.” 2.4.60–61）。そのCeliaたちを，老羊飼いのCorinはもてなすが，「食べ物はないけれど」（“there is nothing / That you will feed on.” 2.4.84–85）とことわりを入れている。Orlandoは森の中の食うか食われるかの状況を語り（“If this uncouth forest yield anything savage I will either be food for it or bring it for food to thee.” 2.6.6–8），食料を求めてDuke Seniorの野営地を襲う（“Forbear and eat no more!” 2.7.88）。Touchstoneは満足に食べられないことに不満を言う（“as there is no more plenty in it, it goes much against my stomach.” 3.2.19–20）。彼らはなぜ腹を空かせ，食べることに執着するのだろうか。Boehrerは，登場人物たちが「たらふく食える者」と「食えない者」の二グループに分かれると指摘する。

> Indeed, *As You Like It*'s dramatis personae might usefully be divided into two groups: those characters who have eaten too much, and those who have not eaten enough.[21]

もともとアーデンの森を含むイングランドのミッドランド内陸部は豊かな穀倉地帯で，ロンドンや沿岸部に穀物を供給してきた。しかし1595年以降，厳しい飢饉によってその関係は崩壊した。皮肉なことに，最も豊かな穀倉地帯であったミッドランド地方は，最も飢饉に苦しんだ。その飢饉を生んだの

---

[21] Boehrer, 82

[22] シェイクスピアは*Coriolanus*（1607–08年）において囲い込みに反対する一揆のひとつ「ミッドランドの五月蜂起」（1607年）を題材に使った。

が，囲い込みと穀物の買い占めである。[22]隣接した地域からの穀物の流出を避けるため，あるいは穀物価格の取り決めに異を唱えるために，各地で穀物暴動が起き，ケント州では1585～1603年の暴動発生件数は11回にのぼった。[23]

4. 森の中の現実（2）囲い込み

同時代の現実を投影する場面としてこれまでにもしばしば注目されてきたのは，羊飼いのCorinの存在や，その（元）雇用主のCarlot（舞台上には登場せず言及されるのみ）が話題となる場面である。初めてRosalindの一行と出会う場面で，Corinは自らの生活が楽なものではないと語る。

TOUCHSTONE　Holla, you clown!
ROSALIND　Peace, fool, he's not thy kinsman.
CORIN　Who calls?
TOUCHSTONE　Your betters, sir.
CORIN　Else are they very wretched.（2.4.63-67）

続く会話で，彼は雇われ羊飼いで，主人はけちな守銭奴，小屋も羊も草地も売りに出されていること，食料もわずかなことが語られる。

CORIN　But I am shepherd to another man
And do not shear the fleeces that I graze.
My master is of churlish disposition
And little recks to find the way to heaven
By doing deeds of hospitality.

[23] パトリック・コリンソン編『ブリテン諸島の歴史　6：16世紀　1485-1603年』（慶應義塾大学出版会），2010, 50

Besides, his cote, his flocks and bounds of feed
Are now on sale, and at our sheepcote now,
By reason of his absence, there is nothing
That you will feed on.（2.4.77–85）

三幕五場でSilviusはCorinの元雇用主の名前を“Carlot”と呼んでいる（3.5.109）。アーデン版の注には，Carlotのモデルは実在する悪名高き囲い込み主John Quarlesであるという説が紹介されている。Quarlesはロンドンの反物屋で，1596年にエセックス伯からウォリックシャーとその東に隣接するノーサンプトンシャーの境界にあるコーツバック（Cotesbach）の荘園を買った。彼の容赦ない囲い込み策と，小作人に対する厳しい取り立ては悪評を呼び，その後十二年間にわたる暴動を引き起こしたという。[24]劇中，アーデンの森で牧羊を営んでいたCarlotは，土地と羊を売って，現金を手にする。これは実際のアーデンの森において牧羊という伝統的農業形態が危機にさらされていたことを示している。1500年以降，アーデンの森に点在した荘園の数は減少していった。荘園経済は古くから牧羊を重要な収入源としていたが，人口増加に伴って穀物需要が高まり，イングランドの農業は牧羊から穀類栽培へと転換していったのである。特にウォリックシャーを含むミッドランド地方はbread countryと呼ばれ，穀類を他の地域に供給する穀倉地帯となった。十七世紀初めには，アーデンの森は開墾され，他の地域に穀物を供給すべく穀類が栽培されるようになっていた。[25]このような背景からわかるように，Carlotは大してもうけにならない牧羊業に見切りをつけて，売り払ったのである。

囲い込みと言えばトマス・モアが「羊が人を食う」と批判したことで，牧羊のために小規模農地を囲って大規模な牧草地を確保することと認識されが

[24] Dusinberre ed., 3.5.109の注参照。

[25] Richard Wilson, ““Like the old Robin Hood”: *As You Like It* and the enclosure riots”, *Shakespeare Quarterly Vol.43, No.1*（Spring, 1992）, 15–18

ちである。しかし，シェイクスピアの生きた十六世紀末には，牧羊のための囲い込みはほとんど行われなくなっていた。

> この時代［一六世紀］の囲い込みは過去の歴史家が描いてきたような広く流布していた問題ではなかった。より多くのものは一六世紀よりも一五世紀に行われたように思われ，耕作地から羊の放牧地への転換は，テューダー朝初期のモラリストから激しい反論を浴びた…[略][26]

十五世紀に行われた牧羊のための囲い込みは，荘園領主によるものだったため，領主的牧羊囲い込みと呼ばれる。一方，十六世紀の囲い込みは，裕福な地主や平民が耕地を求めて広大な土地を囲った農民的囲い込みである。ノーサンプトンシャーの例を挙げると，この地域は人口が多く穀物需要が高かったため，耕作に意欲的で，農民的囲い込みが進んで共同地にまで耕作が拡大した。共同地で小規模な放牧や耕作を生活の糧にしていた零細農民は，土地を追われ，新たな貧困層を形成した。ノーサンプトンシャーでは，農民的囲い込みは，領主的牧羊囲い込み以上に人口減少をもたらしたという。[27] アーデンの森とその近郊も例外ではなく，シェイクスピア自身もストラットフォード郊外で囲い込みを行ったことはよく知られている。五幕三場の二人の小姓が歌う‘It was a lover and his lass’の歌には，のどかな田園風景として「青々とした穀物畑」（“green cornfield,” 5.3.18）や「一面の麦畑」（“the acres of the rye,” 5.3.22）が歌われる。アーデン版の注では，この歌が農業のあり方が伝統的な牧羊業から穀物栽培に変わったことを示しているという解釈を紹介している。[28] Carlotが土地を売りたがっている理由，牧羊業から手を引こうとしている理由は，このような同時代の農業の転換が背景にある。

Richard Wilsonによると，1590年代はストラットフォードの町が数々の災

[26] パトリック・コリンソン編, 45［　］内は筆者。

[27] 酒井，37–38

[28] Dusinberre ed., 5.3.18の注参照。

難に見舞われた時代であり，その影響は喜劇*As You Like It*にも陰を落としている。

> The 1590s were years in which Stratford-upon-Avon endured a series of calamitous fires, plagues, and famines, culminating in the dearth of 1596-97, and the resulting social conflict sears the text of Shakespeare's pastoral comedy.[29]

ストラットフォードの町では囲い込みと穀物の買い占めによって食糧供給が崩壊し，食える者はたらふく，食えない者はますます飢えるという状況が生まれていた。シェイクスピアが1597年に故郷ストラットフォードにニュープレイスを購入したのは，とりわけ農作物が不作だった年のあとで，穀物の価格が高騰していた。ニュープレイスは約三千平方メートルの広さの庭と穀物倉庫が2つ，さらに庭をもう一つ備えた豪邸で，シェイクスピアは町有数の資産家と目されるようになった。彼は個人の消費量を超えるほどの穀物を倉庫に買いためていたが，おそらく転売目的であるとされている。シェイクスピアのように穀物を買い占める投資家が，穀物価格の高騰に拍車をかけ，貧困層の生活を苦しめた。シェイクスピアは1602年5月にはオールド・ストラットフォードの町の北側に107エーカーの土地を購入した。小作料として大麦を徴収し，ニュープレイスの穀物倉庫に保管して高値で売りさばいたとされている。また1605年7月には，ストラットフォード小教区ウェルコーム村の十分の一税を徴収する権利を購入した。[30] シェイクスピアは，*Coriolanus*の中で飢えに苦しむローマ市民と飽食の貴族の姿を描き，イングランドで問題となっていた囲い込みによる農業危機と貧富の差の拡大への懸念を示したが，自らの実生活では，富める側，搾取する側に回ったのである。

---

[29] Wilson, 4–5

[30] Boehrer, 88–90 ; 河合, 31–32

囲い込みに苦しむ田舎町の現実をなぞるかのように，劇中では囲い込みのパロディともとれるような行為が見られる。兄／弟による兄／弟の追放事件である。一つは弟Frederickによる兄Duke Seniorの公位簒奪，もう一つは兄Oliverによる弟Orlandoの追放である。前者は劇の始まる前に完了しているが, 後者の様子は舞台上で表現される。OliverはOrlandoを家畜同然に扱い, 弟がレスリングの試合に勝って町の英雄になると，彼を寝所の小屋もろとも焼き払おうとする。この企てを耳にした忠僕Adamは，Orlandoに逃げるよう忠言する。しかしOrlandoは，家を出るのなら物乞いになるか，追剥（おいはぎ）にでもなるしかないと嘆く。

ADAM　No matter whither so you come not here.
ORLANDO　What, wouldst thou have me go and beg my food,
　Or with a base and boisterous sword enforce
　A thievish living on the common road?（2.3.30–33）

Wilsonは，Oliverを囲い込みで成功した裕福なジェントリーになぞらえ，OliverによるOrlando追放劇は，同時代の囲い込みの現実を風刺したものだと言う。

> To complete the agricultural clearance, therefore, Oliver will burn down the upstart's cottage with him in it or drive him off the land. In this way the Shakespearean text is unequivocal about the realities of enclosure: depopulation, arson, and, as Adam says, "butchery" of those who dare resist（2.3.22–27）.[31]

囲い込みに，強制退去（depopulation）や放火（arson）はつきものだった。

[31] Wilson, 6

土地を追われた人々は，運よく賃金労働にありつけた場合を除いて，施しに頼るか窃盗に手を染めるほかなかったのである。[32] RosalindやCeliaの変装についても，囲い込みとの連想が可能である。Wilsonによると，囲い込み運動に反対した農民一揆の一群の中には，しばしば髭をつけた男装の女性たちが加わっていたこと，1450年にバッキンガム公の猟園を襲った暴徒たちはCeliaが「顔を何かで汚す」（“with a kind of umber smirch my face” 1.3.109）と言っているように，顔を黒く塗っていた。男装と黒塗りの顔は，農民一揆のシンボルであったのだ。[33]

そもそも，登場人物たちが森に逃げ込んで生活するという設定が，囲い込みで土地を追われた人々が無断で森に居住していた現状を舞台上で表現したものであるという見方もある。[34] Boehrerは*As You Like It*は囲い込みとそれにより土地を追われた人々による森林の不法占拠という，十六世紀末の実態を描いていると指摘し，本作がシェイクスピア作品の中で最も色濃く同時代の農業改革の現状を映し出していると述べている。

> *As You Like It* has earned a reputation as the one Shakespearean play most heavily influenced by contemporary changes in English agrarian practice that include enclosure and forest squatting.[35]

劇中では，不当に奪われた土地は元の所有者に返還される。Frederickは公国をDuke Seniorに返して森での隠遁生活を選ぶ（五幕四場）。OliverはOrlandoに土地財産をすべて譲り，森に残って羊飼いとして暮らすと言う（五幕二場）。現実とはうらはらに，芝居という虚構の世界では，不当な強奪は改められ，苦しみに耐えた者たちは報われる。

---

[32] 同上，6

[33] 同上，10–12

[34] Boehrer, 80

[35] 同上，81

5. 森の中の現実（3）森林破壊

三幕二場で話題となる森林破壊と深刻な木材不足も，同時代の社会が抱えていた問題のひとつである。OrlandoはRosalindへの恋心を募らせて，彼女の名を森の木々に刻み込む。

ORLANDO　O Rosalind, these trees shall be my books,
And in their barks my thoughts I'll character,
That every eye which in this forest looks
Shall see thy virtue witnessed everywhere.
Run, run, Orlando, carve on every tree
The fair, the chaste and unexpressive she!（3.2.5–10）

こうしてOrlandoは木という木に恋人の名を刻みながら森の中を駆け巡る。Orlandoが次に現れるのは，Jaquesと言い争いながら登場する場面である。JaquesはOrlandoがやたらに恋人の名を木に刻み込むことを非難する。一方OrlandoもJaquesに自分の詩を批判するのはやめるようにと言い返す。

JAQUES　I thank you for your company but, good faith, I had as lief have been myself alone.
ORLANDO　And so had I, but yet for fashion' sake I thank you too for your society.
JAQUES　God b'wi' you, let's meet as little as we can.
ORLANDO　I do desire we may be better strangers.
JAQUES　I pray you, mar no more trees with writing love-songs in their barks.
ORLANDO　I pray you, mar no more of my verses with reading them ill-favouredly.（3.2.246–255）

Jaquesはシカ狩りを批判し（二幕一場），樹木の損壊を糾弾する。人間の手による自然環境破壊に対する危惧の声はいつもJaquesの口から発される。エリザベス朝のイングランドにおいて，森林破壊は急速に進んでいた。Nardizziは，シェイクスピアの所属する宮内大臣一座が，グローブ座建設の際にシアター座の材木を再利用したことに着目し，十七世紀初頭のイングランドの森林の減少と木材不足について調査している。イングランドにおける木材不足を顕著に表すのは，その急激な価格上昇である。1501年から1601年の百年間に木材の価格は3倍以上に跳ね上がり，1649年には約150年前の十六世紀初頭と比べ6倍に達した。[36] 急速な人口増加を受けて燃料や建築資材として木材の需要が高まったことが原因である。1581年に，ロンドン近郊の製鉄所に対して条例が発布された。その内容は，ロンドンおよびその郊外22マイルにおいて燃料確保の目的で樹木を伐採することを禁ずるものであった。何らかの対策を取らない限り，森林は減り続ける一方という状況まで来ていたのである。このような木材不足に対して，アメリカ大陸から木材を輸入する案や，イングランド国内での大規模な植林計画が真剣に検討された。[37]

アーデンの森の衰退も深刻な問題であった。シェイクスピアと同郷で同時代人の詩人ドレイトン（Michael Drayton, 1563–1631年）は，*Poly-Olbion*（1612年; 1622年）の中で，アーデンの森の衰退を嘆く。*Poly-Olbion*では，自然が擬人化され，詩神ミューズに誘われて歌うという形を取る。第十三歌にアーデンの森が登場し，人間に恵みを提供してきた森が人間によって損なわれていく様子を嘆く。

My many goodly sites when first I came to showe,
Here opened I the way to myne owne over-throwe:
For, when the world found out the fitnesse of my soyle,

[36] Vin Nardizzi, *Wooden Os: Shakespeare's Theatres and England's Trees*（Toronto: University of Toronto Press, 2013), 10

[37] 同上, 10–11

The gripple wretch began immediatly to spoyle
My tall and goodly woods, and did my grounds inclose:
By which, in little time my bounds I came to lose.[38]
（*Poly-Olbion*, XIII 19–24）

川崎寿彦によるとドレイトンは作品中12か所にもわたってアーデンの森の荒廃の様を指摘しているという。[39] ただしドレイトンの環境破壊への嘆きをそのまま現代の環境保護論者の声と同一視するのは時代錯誤であろう。Trevisanは，ドレイトンが今日的な環境保護論者が言うように，自然保護のために人間の営みを制限すべきであると考えていたわけではないと指摘する。自然を擬人化して語らせた例は，ドレイトンに半世紀先立つウィリアム・カムデンの*Britania*（1586年）にも見られ，詩の手法のひとつであったし，ドレイトンの描く森は破壊されるに身を任せ，抵抗の機会は与えられない。[40] 森の木が傷つけられることを批判するJaquesについて，川崎寿彦は「ジェークイズはエリザベス朝期の自然保護主義者（コンサヴェーショニスト）なのである」と言うが，「エリザベス朝期の」という部分を抜きにしてはいけないのである。Jaquesの嘆きは同時代のひとつの形式でもあった。死にゆくシカへの嘆きは，モンテーニュの*Essays*の中の“Of Cruelty”にも見られる。[41]

As for me, I could never so much as endure, without remorse or griefe, to see a poore, sillie, and innocent beast pursued and killed, which is harmlesse and void of defence, and of whom we receive no offence

[38] Michael Drayton, *Poly-Olbion, The Poly-Olbion Project*〈http://poly-olbion.exeter.ac.uk/〉, 2018.1.10.閲覧

[39] 川崎寿彦『森のイングランド』（平凡社, 1997）, 178-9

[40] Sara Trevisan, “‘The murmuring woods euen shuddred as with feare’: Deforestation in Michael Drayton’s *Poly-Olbion*”, *The Seventeenth Century*, Vol. 26（2011）, 242

[41] *Essays*は1580年に第一版がフランス語で出版され，1603年にJohn Florioにより初の英訳が出版された。

at all. And as it commonly hapneth, that when the Stag begins to be embost, and finds his strength to faile him, having no other remedie left him, doth yeeld and bequeath himselfe unto us that pursue him, with teares suing to us for mercie:

------ *questuque cruentus*
Atque imploranti similis: -- Virg. Æn. vii. 521.
With blood from throat, and teares from eyes,
It seemes that he for pittie cryes:

was ever a grievous spectacle unto me.[42]

さて，ロンドン演劇界においても，劇場設営に木材の確保は必須であった。当時の劇場は土台から上はほとんどすべてが木造で，劇場の建設時には大量の木材を必要とした。さらにメンテナンス時にも木材は欠かせなかった。宮内大臣一座がグローブ座を建設したときに，シアター座の材木を再利用したエピソードはよく知られている。1598年12月末，指物師の息子リチャード・バーベッジとロンドンきっての売れっ子大工ピーター・ストリートの指揮のもと，職人たちはシアター座を解体した。材木は気候が穏やかになるまで保管されたのち，テムズ南岸の自由区（ロンドン市の管轄区域外）まで平底荷船で運ばれた。劇場はライバル劇場のローズ座にほど近い場所に再建され，看板を「グローブ」と改め1599年に開業した。このことから，Nardizziは劇団の資金が限られており，木材の供給も不足していたのではないかと推察している。グローブ座の建設費用にどれだけかかったかについては，記録が現存していないため不明だが，1600年建設のフォーチュン座は所有者兼経営者

[42] "Of Cruelty", *Montaigne's Essays* Book II, 11. trans. John Florio（1603）, Luminarium: Encyclopedia Project,〈http://www.luminarium.org/renascence-editions/montaigne/2xi.htm〉, 2018.1.10.閲覧

であるヘンズロウの日記により，材料費と工賃を合わせて520ポンドかかったことがわかっている。シアター座の建設にかった費用は，推定500～700ポンドといわれる。[43] 比較材料としてシェイクスピアが不動産の購入にあてた額を挙げると，彼が豪邸ニュープレイス購入に支払った額は60ポンド，オールド・ストラットフォード近くの107エーカーの耕地には320ポンド支払っている。[44] 職人の日給が1シリング，ストラットフォードのグラマースクールの教員の年収が40ポンドだった時代である。劇場建設に巨額の資金が必要だったことが分かる。

木材不足や森林破壊は同時代の深刻な環境問題であった。Jaquesの「木を痛めるな」(“mar no more trees” 3.2.252)という言葉は, O字型の木造劇場(“this great wooden ‘O’” *Henry V*, 1.1.）で芝居のなりゆきを見つめる観客の耳には, かなりの現実味を伴って響いたことであろう。

6. 文学の伝統としての森

シェイクスピアは，上に見てきたように，アーデンの森をめぐる同時代の現実を作中の森に投影させている。しかしながら，彼は最後に森のもつ超自然的な力に効力を発揮させている。*As You Like It*が大団円に終わるきっかけは，OliverとFrederickの改心だが，それを引き起こすのは森の超自然的な力である。Oliverは本来ならばイングランドに（そして種本の設定であるフランスにも）いるはずのないライオンに襲われそうになる。Orlandoが兄を救う場面を，当の兄本人が語る。

OLIVER　　He threw his eye aside,
　　And mark what object did present itself.
　　Under an oak, whose boughs were mossed with age

[43] Nardizzi, 15-16

[44] 河合，30-32

And high top bald with dry antiquity,
A wretched ragged man, o'ergrown with hair,
Lay sleeping on his back; about his neck
A green and gilded snake had wreathed itself,
Who with her head, nimble in threats, approached
The opening of his mouth. But suddenly
Seeing Orlando, it unlinked itself
And with indented glides did slip away
Into a bush; under which bush's shade
A lioness, with udders all drawn dry,
Lay couching, head on ground, with catlike watch
When that the sleeping man should stir. For 'tis
The royal disposition of that beast
To prey on nothing that doth seem as dead.（4.3.101–117）

この場面はまるでおとぎ話の一場面のように語られる。ここに登場するオークは老木で，苔に包まれ，その幹はは高くそびえ，てっぺんは樹液が届かず葉をつけられないほどに伸びている。オークは樹木の中の王者であり，古くドルイド信仰では樹木信仰の対象でもあった。その森の王たるオークの根元で事件は起きる。横たわるのは，ぼろをまとい髪は伸び放題のOliverである。三幕一場でFrederickに土地財産を没収されたOliverは，放浪のすえ森にたどり着いく。Oliverが公国を去る三幕一場前後の状況を考えると，彼が追放されてからオークの木の下にたどり着くまで，合理的に考えれば時間は数日しか経っていないと思われる。[45] しかし，木の根元に横たわるOliverは，あた

[45] この前の二幕七場ではOrlandoがDuke Seniorらの野営地に受け入れられ，このあとの三幕二場ではOrlandoがRosalindの名を木に刻みつけている。二幕七場と三幕二場の間に時間のずれがあるとしても，物語の連続性を考えると，その間はほんの数日であると考えるのが妥当であろう。数か月，数年といった長期間ではないと思われる。

かも長い期間放浪していたかのように髪は伸び放題でくたびれている。眠っているOliverを狙って，まず蛇が登場する。蛇は知恵と悪魔の化身とされ，深い象徴性をもつ。次に腹をすかせた雌ライオンがOliverを狙う。そこへ偶然通りかかったOrlandoは自ら負傷しながらも兄を助ける。時間の経過や登場する生き物，老木の描写など，この場面はそれまでの場面に比べて超自然的で現実味に欠ける。それまで，森は文学の伝統にもとづく牧歌的な避難所として機能し，また現実の社会問題を投影する場ともなっていたが，Oliverが弟に救出されたことを報告する場面から，森は突然魔法がかった超現実的な領域へと姿を変える。最終場の結婚の神Hymenが登場する場面はそのクライマックスである。最後に，最終幕における森の描かれ方について考察し，劇中の森の役割についてまとめることとする。

7. 変化する森

最終幕では森の隠遁の場としての役割が強調される。五幕四場でHymenによる結婚の祝福が行われた直後に，Orlandoの二番目の兄で大学に行っていたJaques de Boys[46]が突然現れる。彼の伝えるところによると，兄の息の根を止めようと森へやってきたDuke Frederickが，森のはずれで一人の隠遁者に出会い，すっかり改心して，兄に公爵の地位を返還し自らは世捨て人になると決意したという。これを聞いた皮肉屋のJaquesは大団円の輪に加わらず，Frederickを追って自分も隠遁すると言い出す。

JAQUES　Sir, by your patience.
［*to Jaques do Boys*］If I heard you rightly,
The Duke hath put on a religious life
And thrown into neglect the pompous court.

[46] Duke Seniorの廷臣であり皮肉屋のJaquesとは別人。

JAQUES DE BOYS

He hath.

JAQUES　To him will I; out of these convertites

There is much matter to be heard and learned.（5.4.178–183）

森を隠遁の場とするのは文学の伝統であり，シェイクスピアは『アテネのタイモン』（*Timon of Athens*, 1607–8年）や『シンベリン』（*Cymbeline*, 1609–10年）においても森の中の洞窟に住む隠遁者を描いている。アーデンの森の洞窟はDuke Seniorらに隠れ場を提供していたが，彼がそこを去り宮廷に戻ることになると，代わりにDuke FrederickとJaquesを迎え入れる。つまり森は，そこを必要とする人々を受け入れ，彼らが去ると同時に役目を終えるのではなく，再び新たな隠遁者を受け入れるのである。森の役割はその後も継続していくことが予想される形で芝居は幕を閉じる。

ここで，森について最初に言及がなされる一幕一場をふりかえってみる。Charlesは森に隠れ住むDuke Seniorらをロビン・フッドの一党に例え，その暮らしぶりはさながらかつての黄金時代のようであると伝える（1.1.110–113）。しかし第二幕で場面が実際に森に移ると，自然の厳しさや飢え，囲い込みによる影響や森林破壊などの現実的な問題が提示される。そして終盤の四幕三場では，Oliver救出の場面が超自然的な森の描写とともに描かれ，さらに最終場では文学の伝統である隠遁の場としての役割が強調される。つまり森の描かれ方は，非現実的な描写から現実味を帯びたものへ，そしてまた非現実的な描写へと戻っているのである。これが*As You Like It*が「社会批判の道具としては弱い」と言われる所以であるかもしれない。もしシェイクスピアが*As You Like It*を通して同時代の社会のあり方に疑問を投げかけようと意図したならば，それは非常に注意深い形で行われている。彼は文学の伝統という隠れ蓑を使い，劇中の森が架空の場であることを強調した上で現実の社会が抱える問題を描き込んだのである。つまりこの作品は見方によっては十分に辛辣な社会批判となり得るのである。実際のシェイクスピアは囲い込み

を行い，Corinのような零細農民を苦しめる立場にいた。伝記的資料からうかがい知れる作者像と，作品にはどこか矛盾があるように思える。シェイクスピア自身がどのように考えたかについては，現時点では議論に十分な材料が揃っているとは言えないため，ここではTouchstoneの「どう判断するかは森次第」（“Let the forest judge.” 3.2.119）という言葉を借りるにとどめることにする。

ACT	SCENE	LOCATION	NUMBER OF LINES	ROSALIND	CELIA	DUKE SENIOR	DUKE FREDERICK	ORLANDO	OLIVER	ADAM	DENNIS	CHARLES
1	1	Oliver's orchard	162					✔	✔	✔	✔	✔
1	2	outside the court	278	✔	✔		✔	✔				✔
1	3	the court	135	✔	✔		✔					
2	1	Forest of Arden (woods)	69			✔						
2	2	the court	21				✔					
2	3	Oliver's orchard	76					✔		✔		
2	4	Forest of Arden (pasture)	99	✔	✔							
2	5	Forest of Arden (woods)	56									
2	6	Forest of Arden (woods)	18					✔		✔		
2	7	Forest of Arden (woods)	204			✔		✔		✔		
3	1	the court	18				✔		✔			
3	2	Forest of Arden (woods/pasture)	417	✔	✔			✔				
3	3	Forest of Arden (pasture)	100									
3	4	Forest of Arden (pasture)	55	✔	✔							
3	5	Forest of Arden (pasture)	141	✔	✔							
4	1	Forest of Arden (pasture)	206	✔	✔			✔				
4	2	Forest of Arden (woods)	19									
4	3	Forest of Arden (pasture)	181	✔	✔				✔			
5	1	Forest of Arden (pasture)	63									
5	2	Forest of Arden (pasture)	117	✔				✔	✔			
5	3	Forest of Arden (pasture)	47									
5	4	Forest of Arden (woods)	196	✔	✔	✔		✔	✔			
Epilogue		Forest of Arden (woods)	21	✔								
			2699									

lines located in pasture	1009
lines located in woods	583
lines located in both pasture and woods	417
total lines located in the forest	**2009**

LE BEAU	TOUCHSTONE	AMIENS	JAQUES	CORIN	SILVIUS	PHOEBE	AUDREY	SIR OLIVER MARTEXT	WILLIAM	HYMEN	JAQUES DE BOYS	FORESTERS	LORDS, ATTENDANT ON DUKE FREDERICK	LORDS, COMPANIONS OF DUKE SENIOR	PAGES
✔	✔												✔		
													✔		
		✔												✔	
													✔		
	✔			✔	✔										
		✔	✔											✔	
		✔	✔											✔	
	✔		✔	✔											
	✔		✔				✔	✔							
				✔											
				✔	✔	✔									
			✔												
			✔									✔		✔	
					✔										
	✔			✔			✔		✔						
					✔	✔									
	✔						✔								✔
	✔	✔	✔		✔	✔	✔			✔	✔				